「餘りえゝもんやないな」
「けども、諸國を乞食仕て廻つてお歸りになつて、酢いも甘いも嚙み分けて御座つて、堂宮でお寢みになつた事もあるやろし、狼と後先で寢なはつたやろ、女のバリ〳〵位いが怖いやなんて、モウ人間を廢めなはれ」
「オイ德兵衞、あんまり馬鹿に仕いなや、何ぢやいなえらさうに、おこかいな」
「若旦那、甚い怒つてなはるな」
「怒らいでかいな」
「マアお聞きなはれ、今日の所ではバリ〳〵が怖いと云ふてる場合ぢや御座りまへん、其の辛抱さへ仕なさつたら、先方の身代が皆貴方さんの物になりますので、孃が折節お出ましになる姿を見ると、何所に一ツの不足はなし、お母さんも云ふてなさる、夜中のバリ〳〵が不思議で、何うぞ此の病氣が治つてくれたらと、何時も泣いておられる、貴方さんが我慢して先方へ行つて其の病氣を治して上げなさつたら、孃も嬉び、お母さんも滿足、貴方さんも大威張りだすせ、又あれだけの身代が自由になりますが、一ツ我慢をして行きなはれ」
「そないに云はれると行かんならん樣になるがな、そんなら一ツ命を棒に振つたと思ふて行こう、今夜から行こう」

「マアお待ち遊ばせ、貴方さんお出でなさるお心なら、先方の仲人に一應、交渉つて見ませう」と云ふので先方へ話をする、緣が行合ひましたものか、そう云ふ大家の若旦那で、苦勞をなさつたお方がお越下さるなら何より結構な事やと云ふので、貰ひまへう、上げまへう、と愈々話が決りました、斯う話が決つた上は善は急げ、何日に婚禮を仕やうと結納も取り交し、日取も決りまして、德兵衞から親旦那に此の話を致しますと、お父さんもお嬉びで、さて當日になりますと若旦那はいそ〳〵仕て居ります。
「德兵衞、今夜行くねんなア」
「ヘイ若旦那、風呂へ入つて散髮も仕てお出でなはつたか」
「フム朝から風呂へ五度行つて、散髮を二度仕て、髭を三度剃つた」
「一日に風呂へ五度も行く人がおますかいな」
「風呂の五度は應へなんだが、髭の三度目は痛かつたで」
「當然だすがな」
「お前に一度尋ねようと思ふて居たが、何方みち今夜は紋附が要るやろ」
「先方へお行きになつたら、貴方さんの好きな物をお作になつたらよろしいが、今日は是れを召してお越遊ばせ、茲に紋附が御座ります」